

「事業名：飯舘村における農業再生と風評被害払拭のための教育研究プログラム」 平成30年度補助事業の実績・成果

東京大学 連携市町村：飯舘村

連携市町村との協定締結日：平成30年3月5日 現地拠点：福島県相馬郡飯舘村佐須滑87

事業のポイント

事業提案者は、原発事故の3か月後から飯舘村に赴き、NPO法人や農家と協働で独自の農地除染法を開発し作物の試験栽培を実施した。その活動の中、学生の現場見学会を実施して現地訪問前後における学生の意識の変化を目の当たりにし、飯舘村の農業復興には放射能汚染地というハンデにめげずに新しい日本型農業の創設にチャレンジする若者を育成することの重要性を痛感した。そこで本事業では、これまで蓄積されてきた大学知を教育研究活動に展開し、学生を飯舘村の現地に連れて行くことで学生に「現場を見ることの重要性」を実感させると共に、教員とフィールド研究を行うことで大学の社会的価値と地域復興のあり方を考えさせる機会を設ける。

今年度の活動実績

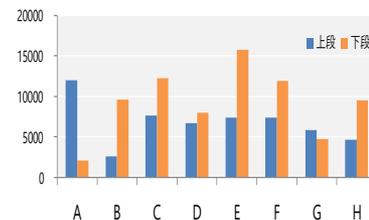
今年度の活動は大きく以下の2つのプログラムを主軸に行われた：(1)学生の飯舘村における現地体験と意識変化の評価、(2)農業再生のための研究プログラム。まず(1)については、現地における住民との交流や村内見学、ワークショップを含めるフィールドワークプログラムを3つの日程(10月6日～7日、10月14日～15日、11月25日～26日)に分け実施し、全国各地の大学生を招聘した。基本的な二日間の構成としては、まず初日に村内見学を行い、二日目に「飯舘村との“寄り添い”方を模索する」と「飯舘村の将来を設計する」の2つをテーマとして、住民の方々と交えたワークショップを行った。ただし、10月7日においては、ワークショップの代わりに現地農家の方のご協力により稲刈り体験を行った。なお、本ワークショップの全行程は、Twitterの「#までい大学」で検索することで、追えるようになっている。また(2)については、水田環境中の放射性セシウム分布状況についてGPS付表面線量測定器を用いて調査した。ダイズの放射性セシウム吸収に関する分子生物学的な検討として、現地圃場からダイズ根を採取し、カリウム吸収関連遺伝子の発現を調査した。双方の結果は、それぞれのプログラムリーダーを通して共有され、フィードバックを得た後に、来年度以降の活動に反映される予定である。



村内見学およびワークショップの様子

今年度の成果

- ・事業開始前に蓄積されてきた専門的な知識を教育研究活動に展開し、全国各地から募集した学生を飯舘村の現地に連れて行くことで学生に「現場を見ることの重要性」を実感させると共に、教員とフィールド研究を行うことで大学の社会的価値と地域復興のあり方を考えさせるワークショップを開催し、「牛・花カメラ」、「きのこ山菜研究所」などの研究PJが立ち上がった。
- ・水田の放射性セシウム分布状況を調査し、畦などの傾斜面において、斜面下部で斜面上部より放射性セシウムが高い箇所があり、今後、斜面から水路への放射性セシウムの流入について調査が必要と考えられた。
- ・ダイズの放射性セシウム吸収に関する分子生物学的な検討として、低カリウムの現地圃場で栽培したダイズ根を採取し、カリウム吸収に関与する遺伝子が発現していることを確認した。
- ・ダイズを用いた根箱実験から、粘土鉱物(バーミキュライト)を土壤に添加した場合、根近傍域での水分動態は影響を受けないものの、根によるセシウムおよびカリウムの吸収は抑制されることがわかった。



傾斜面上部と下部の放射性セシウム濃度